



桜だより

伊丹市立桜台小学校
校長 日外 亮

1月15日(水)

今日は、「阪神・淡路大震災、東日本大震災の教訓を生かし、地震が発生した場合の迅速かつ適切な身の守り方や避難の仕方、災害への備え方について学習する。」というねらいで防災避難訓練がありました。緊急地震速報が流れて、避難指示の放送があつてから、約5分間で全校生の運動場への集合が完了しました。真剣に取り組む姿は、大変立派でした。

子どもたちは、防災避難訓練及び事前・事後指導を通して、震災の恐ろしさや自分の命を守ることの大切さについて、改めて学習しました。「わが家の防災会議」と題して資料を配布しておりますので、ぜひ、お家でも話し合ってください。

1月17日(金)

1995年1月17日、兵庫県南部を震源とし、マグニチュード7.3の大地震が発生しました。今年は、その阪神・淡路大震災から30年という節目の年を迎えました。この日は、私にとっても特別な日です。私の実家は神戸市東灘区にあり、被災して全壊しました。その時、私はたまたま外出しており、自分の部屋に居たら命は無かったと後で母から言われました。今、生きていることに、生かしていただいていることに心の底から感謝しています。また、不幸中の幸いで、何とか家族も全員無事でした。

向かいの家は、すぐに火事になりました。みんなで必死に消火活動を行いましたが、残念ながら消し切ることはできませんでした。友達の大ちゃんの家も全焼し、何もかもが無くなりました。大ちゃんは、アルバムも燃えてしまい、幼少期の写真が1枚も残っていないこと、形ある家族との思い出が消えてしまったことが一番悲しいと言っていました。私は、あまりの衝撃に、「ほんまやなあ…」と言って、寄り添うことしかできませんでした。

家の片付けをした後、近所の幼稚園が避難所になっていると聞いて、家族で避難することにしました。グォーッと地鳴りがしては、その後にガタガタガタッと、1日中、ずっと激しい余震が続きました。しばらくすると、「グ」の瞬間に「来た!」とを感じるようになりました。生きた心地がせず、時間が経つのがとても長く感じました。あの地震に対する鋭い察知能力は、30年経った今でも体に染みついています。

その一方、余震が来る度に、「これが勉強したP波とS波かあ。」とか、「初期微動継続時間、今回は長いなあ。」とか、妙に冷静で落ち着いている自分もいました。

突然やってきた非日常の世界。昼間は、友達を助けに行ったり、水を汲みに行ったり、がれきを運んだり、自分にできることはやろうと決めて、何でもやりました。途中で、ふと空腹であることに気付きました。朝から何も食べていませんでした。避難所に戻ると、家族も何も食べていませんでした。「何か買ってくるわ!」と言って飛び出したものの、周りに開いている店はありませんでした。遠く離れたコンビニエンスストアまで歩いて行くと、そこは既に長蛇の列でした。すぐに品切れになりました。次の店も、その次の店も品

切れでした。街に食べるものは、全くありませんでした。

夕方、近くで自衛隊が食料を配るという情報が入りました。そこに足を運ぶと、まだ列は短く、並んで待つことにしました。30分ほどすると車両が到着し、順番に配布が始まりました。「これで家族も喜ぶぞ！」と思っていたのですが、貰ったのはパン1つだけでした。その直後、後ろから押されて列は乱れ、怒号と罵声の中、我先にと食料の奪い合いが始まりました。何ともおぞましい光景でした。

でも、人それぞれに様々な背景があり、きっと、そうせざるを得なかったのでしょう。突如奪われた日常、みんな生きることに必死だったに違いない。私も貰えていなければ、そうしていたかもしれません。避難所までの帰り道は、日頃考えもしなかったことを、いろいろと考えました。

貰ったパンは、結局、親に渡しました。何だか、そうしたい、そうすべきだという気持ちでした。

その後も、自分に何かできることはないかと地域を回って手伝いをしていると、友達ののぶおくんに出会いました。「お互い無事で良かったね！」と、握手しながら笑顔で話していると、のぶおくんは、「ひーくん（私の小学校時代のあだ名）、これ、食べえなあ。」と言って、個包装された1粒のあめ玉をポケットから出して、私にくれたのです。

ずっと気が張り詰めていたこともあってか、のぶおくんの優しさ、温かさに触れ、涙が出たことを覚えています。

毎年、1月17日を迎える度に、のぶおくんのことを思い出します。